HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	山本, 順司; 井上, 猛
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 40
Issue Date	2020-06-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82858
Type	book
File Information	MuseumNews_40_web.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

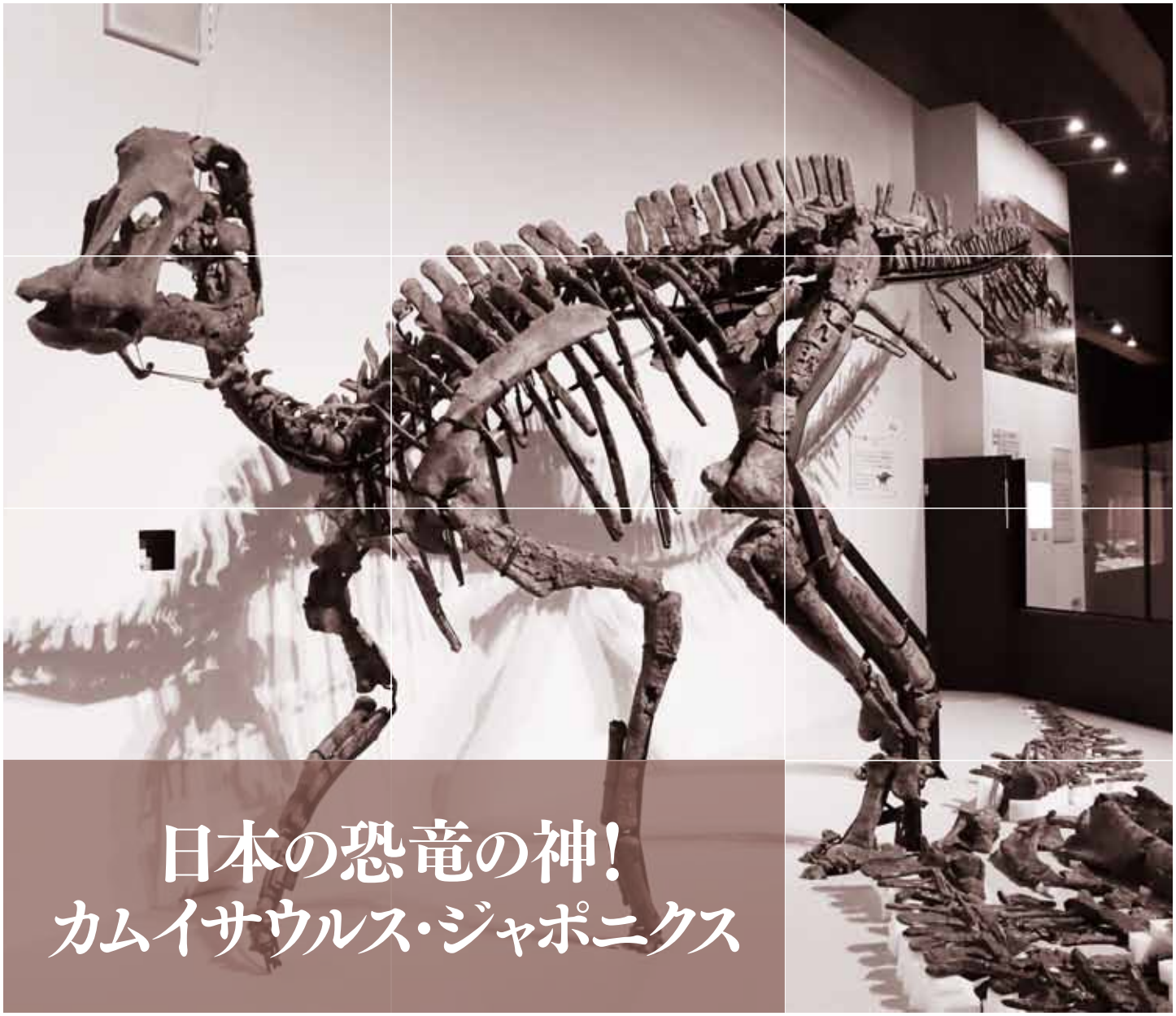
ISSN 1345-059X
北海道大学 総合博物館

THE HOKKAIDO UNIVERSITY

MuseumNews

北海道大学総合博物館ニュース

ISSUE 40
June 2020
2020年6月発行



日本の恐竜の神！
カムイサウルス・ジャポニクス

CONTENTS

01 “むかわ竜”を新属新種の恐竜として「カムイサウルス・ジャポニクス」と命名

02 夏季企画展示開催報告 「K39: 考古学からみた北大キャンパスの5,000年」

03 むかわ町穂別産カムイサウルス全身復元骨格が完成！

04 松枝大治先生の思い出

06 博物館実習

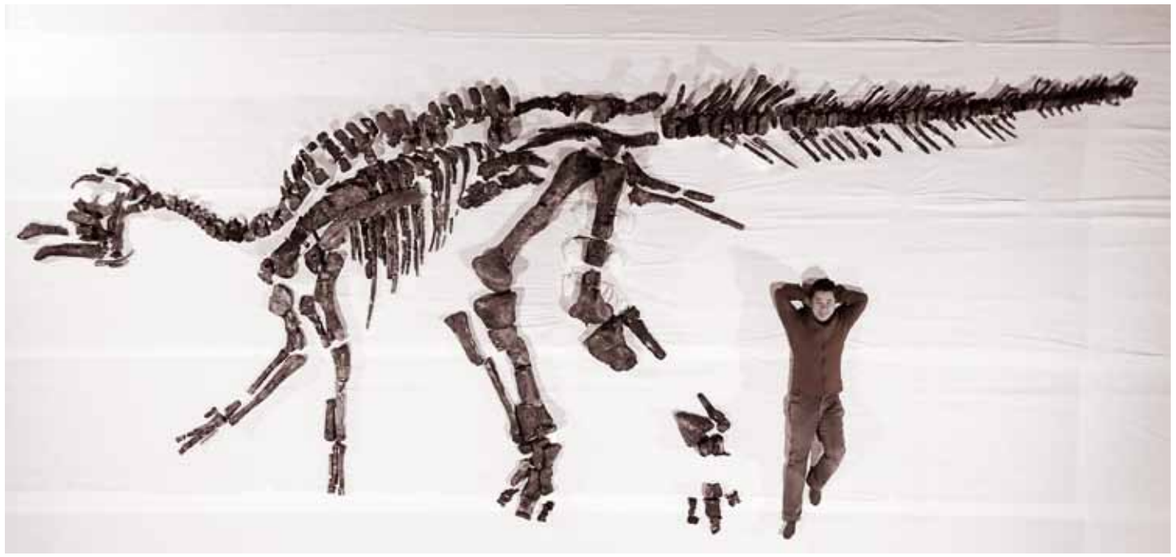
09 北大生による展示解説 in 北大祭、オープンキャンパス、ホームカミングデー

12 シンポジウム 「北大札幌キャンパス遺跡群を探る」開催

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

“むかわ竜”を新属新種の恐竜として「カムイサウルス・ジャポニクス」と命名

全身骨格



“むかわ竜”として知られてきた恐竜にようやく学名がつきました。北海道大学総合博物館の小林快次教授を中心とする研究グループにより、“むかわ竜”の研究が進められ、2019年9月6日にScientific Reportsという学術誌に論文が掲載されました。

この研究により、“むかわ竜”は、他の恐竜に見られない3つの特徴（固有な特徴）を持ち、さらに、ユニークな13の特徴の組み合わせを持つことから、新しい恐竜であることが判明しました。「むかわ竜」は、新しい恐竜として、「カムイサウルス・ジャポニクス *Kamuysaurus japonicus*」という学名が付けられました。「*kamuy*」はアイヌ語で「神」、「*sauros*」はトカゲ、「*japon*」は日本を意味します。つまり、この学名は，「日本の竜神（日本の神トカゲ）」という意味です。

「竜神」には、豊作や豊漁を願うための水の神を意味するそうです。むかわ町は、北の穂別地区と南のむかわ地区で構成されています。この二つの地区は、「鵡川」という川で結ばれ、その川の水によって栄えた地区です。「鵡川」こそ、この地区にとっての水の神だと言えます。つまり、カムイサウルスは、この鵡川の化身でもあると思っています。さらに、カムイサウルスは、約7,200万年前に積もった海の底の堆積物から発見されています。海から蘇った恐竜として、水の神「竜神」にふさわしいでしょう。また、「カムイ」には、アイヌ語として北海道らしさが表現され、種小名が日本を表しています。私たちは、「カムイサウルス・ジャポニクス」という学名に「むかわ町」「北海道」そして「日本」という異なった地域の規模にとって、「宝」であり、「神」であるという思いを込めたのです。そして、論文が掲載されたちょうど一年前の2018年9月6日の北海道胆振東部地震によって被害を受けた胆振地区の復興の願いも込められており、カムイサウルスが復活したように胆振地区も復活して欲しいと願っています。

この研究で、カムイサウルスが他の恐竜とどのような関係にあるかを探るべく、系統解析というものを行いました。その結果、カムイサウルスはハドロサウルス科ハドロサウルス亜科エドモントサウルス族に属し、ロシアのケルベロサウルスと中国のライヤンゴサウルスに近縁な恐竜であることがわかりました。これらの恐竜は極東地域のもので、すぐ近くにはカムイサウルスの親戚が棲んでいたということになります。

さて、カムイサウルスはどのような恐竜だったのでしょうか。私たちの研究によると、体長8メートル体重4 ～ 5.3トンの恐竜であることが判明しました。後ろ足の骨（脛骨）の断面を観察した結果、年齢は9歳以上で成長期が終わっている大人（成体）の恐竜だったことがわかりました。また、カムイサウルスの頭には、トサカがありました。そのトサカは、北米から発見されている大人になりきっていないブラキロフォサウルスが持つトサカのような、薄く平たいトサカであったと考えられます。そんなに立派ではなかったかもしれませんが、一応お洒落をしていた恐竜だったのです。

小林快次
（研究部教授／古生物学）



復元画

夏季企画展示

「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」開催報告

●2019年7月19日～ 9月29日

2019年7月19日（金）～ 9月29日（日）に夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」を北海道大学埋蔵文化財調査センターとの共催で開催しました。

北大札幌キャンパスはそのほぼすべてが埋蔵文化財包蔵地、つまり遺跡に登録されています。企画展示タイトルの「K39」は、北（Kita）区にある札幌市の登録番号39番の遺跡で、植物園を除くキャンパスの大部分にあたります。今回の企画展示では、このK39遺跡から出土した「モノ」にこだわり、私たちの足元の世界で営まれた人々の生活の歴史について7つのゾーンに分けて紹介しました。



展示室内の様子

◉ゾーン1

北大キャンパスの立地とK39遺跡

水環境に恵まれた北大札幌キャンパスの立地をプロジェクションマッピングで紹介するとともに、畜産製造実習棟新営地点からみつかったキャンパス内で最も古い縄文中期（約5,500 ～ 4,500年前）の土器を展示しました。

◉ゾーン2

人文・社会科学総合教育研究棟地点と縄文晩期～続縄文前半期（約2,500 ～ 1,900年前）の遺跡

同地点に残された土器や石器、琥珀玉と屋外炉の復元モデルを展示しました。同地は縄文晩期には河川に面したキャンプ地として、続縄文前半期には居住地として利用されていました。



K39遺跡・総合研究棟（機械工学系）地点の地層剥ぎ取り標本

◉ゾーン3

ポプラ並木東地区地点と続縄文後半期（約1,900 ～ 1,300年前）の遺跡

同地点ではこの時代の墓とキャンプの跡がみつかっています。北大キャンパスでみつかった土器を基準に命名された続縄文終末期の土器、「北大式土器」を多数展示しました。

◉ゾーン4

恵迪寮地点と擦文期（約1,300 ～ 800年前）の遺跡

同地点では、擦文中期前半の集落址がみつかりました。たくさんの擦文土器のほか、本州からきた須恵器や紡錘車、文字が刻まれた「刻書土器」、そして附属図書館本館再整備地点でみつかった住居のカマドと煙道の復元モデルを紹介しました。

◉ゾーン5

附属図書館本館北東地点とアイヌ文化期（約800 ～ 150年前）の遺跡

同地点でみつかった河川に打ち込まれた木杭などを展示しました。魚を捕獲する施設の一部と考えらます。一方、戦時中に農地となった影響などからキャンパス内でみつかったアイヌ文化期の遺物は非常に少ないことも紹介しました。

◉ゾーン6

大学病院ゼミナール棟地点と近代～現代（約150年前～）の北大キャンパス

札幌農学校は1903年に現在のキャンパスへ移転しました。北大で投棄された茶碗や土地改良のために埋設された土管暗渠も過去を知る手がかりとなることを紹介しました。

◉ゾーン7

総合研究棟（機械工学系）地点の地層が展示物になるまで

現在、常設展示の一部となった正面玄関にある約4mの地層剥ぎ取り標本には約5,000年前から現在までの歴史が留められています。発掘現場での地層の観察から剥ぎ取り、調査、そして展示物になるまで、その一部始終を映像で紹介しました。

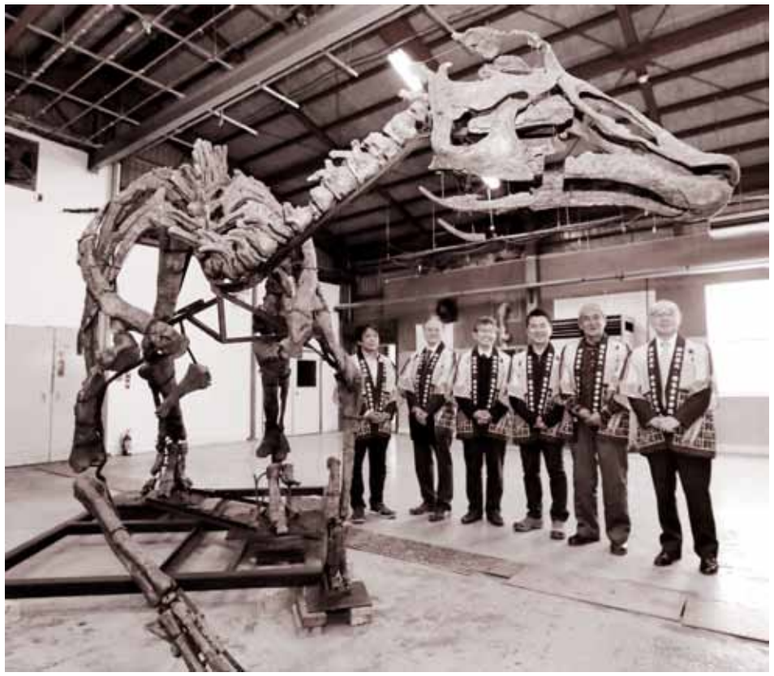
展示の設営にあたっては、考古学ボランティアの皆さんに多大なるご協力をいただきました。石崎幹男さん撮影の素晴らしい写真の数々が展示室に彩りを与え、山下俊介先生撮り下ろしの映像は発掘現場の雰囲気を生き生きと伝えていました。また、図録の製作から展示物・展示室の準備、関連イベントの開催など、多くの方々、機関にお力添えをいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

江田真毅
（研究部准教授／動物考古学）



展示中のK39遺跡附属図書館本館再整備地点出土のカマドの復元モデル

むかわ町穂別産
カムイサウルス全身復元骨格が完成！



工房での組み立て

カムイサウルスの研究に合わせて、全身骨格の復元作業が行われました。2019年7月13日から10月14日まで、東京上野にある国立科学博物館において、カムイサウルスが展示されることが決まっていたこともあり、全身復元骨格を作成することになりました。カムイサウルスは、丸ごと一体分発見された大型の恐竜としては、日本では初めてのことであり、骨格を復元することは皆が熱望することでした。

全身の復元骨格は、「骨の同定」「骨の関節の確認」「姿勢の決定」という段階を経て制作されます。まず、「骨の同定」を行います。発掘されクリーニングが終わった骨化石は、バラバラの状態で、どの骨かを正確に同定する必要があります。時には、一つの骨が完全に残っておらず、大事な部分が欠けていることがあります。時間をかけて観察し、他の恐竜の骨と比較しながら、どの部分の骨かを推測します。これは、単なる絵合せではなく、解剖学的な観点で矛盾がないかを考えるため、非常にエネルギーを使います。どの骨かある程度確定したら、それぞれの骨がどのようにつながって関節していたかという「骨の関節の確認」を考えます。これは、3次元のジグソーパズルのようなものです。二つの骨を合わせることは比較的簡単ですが、3つ以上の骨によって構成される部分を組み合わせると、必ずどこかが合わなくなります。脱臼しないように、うまく骨の関節具合を考え、組み立てる作業です。そして最後に「姿勢の決定」をします。今回の復元は、海岸をゆったりと歩いているカムイサウルスを表現しました。前あしを地面につけ、ゆっくりと顔を左に向け景色を見ているシーンです。この体の姿勢を自然にするために、背骨の骨の流れ方、後ろ足の踏み込み具合など、全体のバランスをとりながら姿勢を決めていきました。

国立科学博物館でお披露目されたカムイサウルスは、68万人近くの人に見てもらうことができました。カムイサウルスにとっては、最高の舞台となったのです。

小林快次
（研究部教授／古生物学）

むかわ町と相互協力協定を締結

●2019年8月23日

2019年８月23日「むかわ町」と相互協力協定（更新）を締結しました。 締結式には、竹中喜之むかわ町長、小澤丈夫館長、小林快次教授、他、教職員が出席しました。

「むかわ町」と「北海道大学総合博物館」は、2014年９月に「むかわ竜」の発掘を継続し、研究・活用を進めるにあたり、これまで以上に連携・協力関係を深めることを目的として相互協力協定を締結しました。このたび、協定を更新することによって、これまでの協力関係をさらに拡大させ、恐竜をはじめとする古生物学の研究促進・普及啓発、科学技術・文化の振興、地域振興、学校 教育・生涯学習の振興など幅広い分野での、より具体的な連携・協力を深めて行くことを目的として、相互の発展を目指すものとします。

浪塚良平
（事務部／学術担当補佐）



右から竹中喜之むかわ町長、小澤総合博物館長、小林教授

松枝大治先生の思い出





◉大原 昌宏（研究部教授／昆虫体系学）

博物館育ての親、松枝先生

2019年9月22日7時54分、松枝大治先生が亡くなられた。突然の肺炎で入院されたという知らせを受けた時には、すでにICUに入られていた。知らせから3ヶ月後にご逝去され、あっという間のお別れになってしまった。博物館設立時、教授であられた先生は、その任席を果たすため、実に多くの苦労と貢献をされてきた。館の例規作成、資料部研究員依頼、膨大な什器類の購入、全学を学際的に結ぶ展示の作製など、多様かつ膨大な業務を指揮しまとめてこられた。設立から12年間、まさに北大総合博物館の育ての親であった。MOU締結のためインドネシアに一緒に出張させていただいたのも良い思い出である。学外では、「博物科学会」を立ち上げられ、設立実務を担われた。札幌市・小樽市など地域博物館行政でも、協議会委員長などを勤められ、多大な貢献をされた。2010年4月から1年間、北大総合博物館の館長をされ、新館長を祝う会の挨拶で、目立つリーダーシップではなく、前館長から次期館長への「中継ぎ」役を強調された。挨拶通り、何事も控えめにバランスよく、実に淡々と仕事をこなされ、物事を進める方だった。ユニバーシティ・ミュージアム第一世代として、博物館の発展に尽くしてくださった。心からご冥福をお祈りする。

◉高橋 英樹（資料部研究員／名誉教授）

松枝さんを悼む

松枝さんと顔を合わせたのは、1999年に総合博物館が設立する少し前の準備段階からだろう。それまで松枝さんはキャンパス内の理学部におり、私はキャンパスから離れた植物園にいた。それから開館するまでにさまざまな議論を重ね、その中で化石の箕浦さんや考古の天野さんとは酒を飲みながら喧々諤々やった記憶がある。しかし岩石・鉱物担当の松枝さんと正面切ってやりあった記憶はない。私と松枝さんとはその立ち位置が少し違っており、私は置かれた状況にやや直情的に反応していたのに対し、松枝さんは理性的・冷静に対応していたように思う。また松枝さん自身、人と争うことを好まない温厚な性格でもあった。ただ、学内で博物館の評価を何とか定着させたいという気持ちは一致していたし、開館の準備、開館後の管理運営、展示広報活動を軌道に乗せるために一緒に汗をかいた。新設なった総合博物館教員の第一世代は、このようにして順番に歴史のかなたに消えていくのだろう。

◉天野 哲也（資料部研究員）

松枝大治さんの姿勢

松枝さんとは年齢も同じで、99年の館創設から2012年の定年退職まで一緒だった。教員室も向かい合わせで、やはり近かった高橋さんともども、よく議論した。



当初は教官だけは定員をみたしたが、各分野の資料・標本はほとんどが学部や旧看護宿舎などに押し込められたままであり、それを総合博物館の限られた空間にどう収めるかが大問題であった。加えて、企画展示のほかに2001年の1階常設「125周年記念展示」も迫り、外国人研究者の客員招聘、各種セミナーの実施など不慣れな課題に教員は追われていた。

そのような状況のなか、博物館の要・研究部長として松枝さんは個性的な教官たち（高橋、箕浦、大原、阿部、今村）をなんとかまとめあげ、小泉格館長を支えて創設期を乗り切った。なにがそれを可能にしたのであろうか？そつが無く、目端の利くスマートな人であったが、それ以上に、自身よく口にしていた「相手を認める」姿勢が効いたと思う。

異分野の研究者たちが集まる博物館が威力を発揮してゆくためには、他の分野を理解・尊重するこの精神が欠かせないだろう。松枝さん、北大総合博物館をしっかり見守ってください。

（執筆にあたり、大原昌宏さん作成の「北海道大学総合博物館 年表（10周年記念 編纂）1999 ～ 2009年」に助けられた）

「建築の学生」展

●2019年4月6日・7日

私たち工学部建築都市コースに所属する学生有志は、「建築の役割について一緒に考えてみませんか」というメッセージを掲げて、2019年4月に「建築の学生」展を開催しました。博物館と共催した本企画では、2018年9月に構内に建つ遠友学舎で自主開催した展示会を発展させ、図面や模型を製作した学生自身が来場者に対面で説明することを重視しました。製作者が設計で着目した「敷地」「空間」「体験」の要素で、会場とした知の交流ホールをエリア分けして作品を置き、エリアを繋ぐ通路には敷地調査の資料やスケッチを展示しました。

自分たちが何を考えて何を実現したいかを理解されるように言葉を選んで説明することは非常に難しいことでした。しかし、何度も説明することで考えが整理でき、次第に本企画の目的である「一緒に考える」ことを実現していきました。対話やアンケートの回答には、展示された設計が面白い、ステキなカタチだという感想、災害や積雪から守ってくれるのかという疑問、建築が周辺の地域の歴史・文化、自然、都市、人間の生活などと相互に関係しながら設計されることへの驚きなど、様々な声が寄せられました。老若男女、国内外から、多くの方が来館する北海道大学総合博物館で本企画を行ったことは、学生と来館者ともに、多様な価値観や視点があることに気づく重要な機会となったと思います。

この取り組みは、2020年度開催予定の総合博物館での2回目の「建築の学生」展に引き継がれます。課外活動として、学生が主体的に、様々な方々の生の声を聞き取る試みは、これからも継続していきます。

担当学生： 佐々木悠貴、射場淳、岩佐樹、上木翔太、荻原悠真、加野和奏、久保由香子、河野泉美、小宮山葵、佐藤椋太、澤田昂彬、寺嶋啓介、松田良介、和田大武（工学部）

担当教員： 小篠隆生（工学院）、湯浅万紀子（総合博物館）

佐々木悠貴
（工学院修士1年）


図面、模型、スケッチで構成される展示


来場者に説明する学生達

「地質の日」記念展

「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」

●2019年4月27日～ 6月16日

5月10日の「地質の日」を記念する標記展示が、4月27日（土）～ 6月16日（日）に当館1階展示室で開催されました。市民の皆さんには比較的なじみのない「地質」を知っていただく趣旨で毎年身近な「地質」の紹介を行っており、今回で12回目です。主催は「地質の日」記念展実行委員会・北海道大学総合博物館、共催は日本地質学会北海道支部・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・北海道博物館・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会です。北海道教育委員会・札幌市教育委員会に後援をいただき、北海道大学埋蔵文化財調査センター・山の手博物館・サイエンス・コンソーシアム札幌（札幌科学談話会・札幌市中央図書館・札幌市博物館活動センター）の協力をいただきました。

都市にはそれぞれの川があります。街は三角州や扇状地のように水が豊富なところに誕生するからです。豊平川扇状地に発達した札幌にはかつてはあちこちにメム（湧水池）を水源とする川があり、開拓使時代以前から人々の生活に欠かせないものでした。しかし、街の発展とともに扇状地の起伏は平坦化され、これらの川は失われてしまいました。

本展示では、古い地図や文献、古老たちの言い伝え、地質や地形による復元をもとに、かつてのメムや川の流れ、札幌の失われた自然と風景、そこに暮らした人々の生活を40枚ほどの展示パネルで紹介し、皆さんに逝きし水の都の面影をたどっていただきました。

関連イベントとして、宮坂省吾氏（北海道総合地質学研究センター）による「『水の都』札幌―コトニ川を尋ねて」、古沢 仁氏（札幌市博物館活動センター）による「『水の都』その誕生と消滅 ～身近に残る水の痕跡～」の市民セミナーを当館「知の交流コーナー」で開催し、ともに70名を超える盛会でした。また市民地質巡検「街中ジオ散歩 in Sapporo『コトニ川を歩く』」を宮坂省吾氏と内山幸二氏（山の手博物館）の案内で行い、計29名が参加しました。

在田一則
（北大総合博物館ボランティア）


会場風景



市民セミナー（演者：古沢 仁氏、撮影：宮坂省吾氏）


市民地質巡検（北大構内にて、撮影：桜間静江さん）

博物館実習

●2019年9月3 ～ 6日・9 ～ 12日

総合博物館では、北海道大学学生を対象にした学芸員実習を実施しています。学芸員養成課程のさまざまな科目を受講した後に、博物館の現場で実務を学ぶ科目として位置づけられています。8日間、午前中に演習、午後に第2農場、映像・科学技術史資料、植物、動物の4班に分かれての実習を行いました。短期間では博物館活動の全てを習得するには限界があること、班メンバーの専門レベルに偏りがないこと、所属する研究室では体験できない実習に取り組んでほしいことから、各自の専門分野以外の班に配属された学部4年生から修士課程2年生まで専門分野も異なる16名が、全日程に熱心に取り組みました。

午前中の演習では、小澤丈夫館長による講義をはじめ、当館の教員全員が各自の研究と教育、博物館活動について紹介しました。博物館事務係の井上猛係長による博物館運営や事務業務の説明、研究支援推進員の植松淳子さんと澤出有里さんによる館内サインのパネル製作実習も行われました。


モデルバーンの展示改訂に取り組んだ第2農場班

第2農場班では、近藤誠司研究員の指導のもと、モデルバーンの展示の改訂に取り組みました。展示の流れを見直し、新規展示の制作と既存展示・閉鎖空間の再編成を検討するなか、泥炭・暗渠・測量機器が札幌農学校時代の研究において重要であったことに着目しました。関連情報を収集し、展示パネルに盛り込む内容を整理し、展示物を選定し、展示制作の一連のプロセスを実践的に学びました。

映像・科学技術史資料班では、山下俊介助教と杉山滋郎研究員の指導のもと、A-D Stripsを用いたフィルム劣化調査、学術映画の倫理問題に関する検討、博物館に残された映画「化学実験シリーズ ガスクロマトグラフィー」の所在調査・関係者調査、フィルム編集機材Steenbeckの修理見学、収蔵庫見学、科学機器資料の整理、展示解説向けアプリInfogroveでのコンテンツ作りといった多岐にわたる実習が行われました。


実習内容のプレゼン用資料をまとめる映像班

植物班では、首藤光太郎助教担当の陸上植物分野では、構内で植物を採取し、乾燥させた後に、図鑑や関連書籍、博物館収蔵標本を参照して同定し、ラベルを作成して台紙に標本を貼付し、標本庫に配架するという一連の実習を行いました。阿部剛史准教授担当の海藻分野でも採取を除く一連の標本作製のプロセスを体験し、博物館3階「生物標本の世界」展示室廊下の壁のハンズオン展示「忍路臨海実験所の海藻」をブラッシュアップさせました。展示標本の数を増やし、破損・褪色した標本を交換し、緑藻・褐藻・紅藻に区分して海藻の分類体系に従って再編成し、説明パネルを改訂しました。海藻を用いた人工イクラ作成実験や海藻標本の栞も作成する幅広い実習でした。


海藻標本のハンズオン展示を改訂した植物班

動物班では、江田真毅准教授担当の脊椎動物分野では、鳥類標本を作製し、未整理のキタキツネの頭骨と下顎骨標本を整理して170匹分の頭骨についてデジタルデータベース化しました。大原昌宏教授担当の昆虫分野では、博物館3階「生物標本の世界」展示室の水槽展示の課題解決に取り組みました。構内で水棲生物を採取して展示標本を増やし、疑似水槽スタイルの写真付き解説展示を制作して、ライティングにも工夫し、来館する子どもが座って観察しやすい位置に設置しました。


水槽の解説展示を制作した動物班

最終日の各班の報告会での意見交換や事後レポートからは、実習生達が、資料の保存・調査・研究・展示制作についての知識を深め、さらに博物館の諸活動に込めた教職員の思いを理解したことがうかがえます。

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

「みんなの博物館物語 選ぶ・語る・描く」

●2019年7月6日・13日

理学院専門科目・大学院共通授業科目「博物館コミュニケーション特論 学生発案型プロジェクトの企画・運営・評価」の一環として、大学院生13名が、展示解説イベント「みんなの博物館物語－選ぶ・語る・描く－」を7月第一週の週末2日間に開催しました。

イベントの目的は、博物館に初めて来館された方にも何度も来館されている方にも、学生の視点を通した解説によって、「新しい博物館の見方を伝えること」です。学生達は4月から議論を重ね、この目的を達成するため、各自の研究の専門分野や関心事に関する解説を準備しました。解説した内容は、古生物学や地球惑星科学、植物分類学、動物形態学の他にも、博物館の建物、植物標本を挿んでいた古い新聞紙、顕微鏡、北海道大学の寮歌の歴史、ミュージアムのショップとカフェなど多岐にわたります。更に、一方的に解説を伝えるのではなく、「来館者と対話すること」を目指しました。学生達は参加者用に冊子を用意し、そこには、このイベントの趣旨と博物館の紹介、解説する学生のテーマとプロフィール、そして参加者自身の心に響いた展示や空間の印象を綴っていただく館内の白地図を示しました。他にも解説者の関心事などに合わせてデザインした13枚の異なるオリジナルシールを解説後に配布し、冊子に貼るスペースも用意しました。

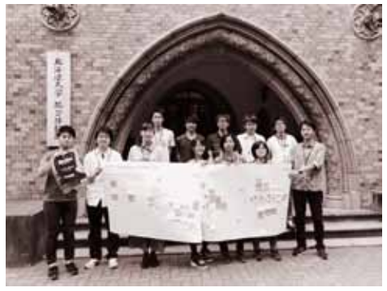
参加者は、まず、解説を聞きたい学生を「選ぶ」ことから始め、学生の解説を聞いて学生と「語る」時間を過ごしていただき、そして、白地図に思いを「描く」ことで、それぞれの「博物館物語」を体験していただきました。いくつかの解説を巡っていただいた最後には、ゴールに設定したエリアに戻っていただき、来館回数や参加動機など属性を伺い、感想や意見を聞き取り、描かれたマップを確認しました。

2日間で約200名が参加し、学生達との対話を楽しんで下さいました。「解説者のおすすめポイントや面白いポイントを聞くことで、より深く展示物を見ることができるようになった」「北大生の解説を聞いて面白かったし、皆よく勉強していると思った」「大学院生の研究を知るよい機会になった」という意見が聞かれ、学生自身の参与観察の結果などと併せて考察した結果、当初の目的を達成し、学生達は手応えを感じたようです。

今回の企画では、企画の趣旨を伝えたり、



参加者に配布した冊子と解説者別シール



参加者の意見をマッピングしてまとめた学生達



顕微鏡の分解能について説明する

各学生の解説内容を伝える紹介動画を4編制作し、博物館の公式チャンネルを開設して、新たな広報活動に挑戦したことも、特筆すべき取り組みとなりました。イベントを企画・運営する授業のプロセスを伝える学生の記事を、次のURL で公開しています。

https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/lesson/communication1/

担当学生： 宇都幸那（環境科学院）、片岡奈々（農学院）、小早川岳大（情報科学院）、大下虎太・小田嶋元哉・下田晨人・鈴木伶音・谷口加奈子・中村仁哉・葉柴隆斗・和田壮平（理学院）、杉浦千瑛（医学院）、森本智郎（生命科学院）

協 力： 首藤光太郎・柴野伸幸・植物及び図書ボランティア（総合博物館）

指導教員： 湯浅万紀子

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

博物館における 北海道大学初任事務職員 実地研修

●2019年7月30日～ 8月2日

本学の2019年度初任事務職員28名の人材育成の一環として、総合博物館での実地研修が実施されました。本研修では、初任事務職員が、来館者への本学の歴史と現在についての説明や展示室での案内といった実務体験を通じて、本学への理解と知識をより深め、職員としての意識を高めるとともに、コミュニケーション能力を身に付けることを目指しました。

研修生は事前に湯浅万紀子教授から博物館の使命や役割、来館者対応についての講義と見学案内を受け、さらに各自が予習を重ねた後、数名のグループに分かれて7月30日から8月2日まで1時間30分の実地研修に臨みました。当日は見学者へのガイダンスや常設展示の案内、企画展示への誘導などを行いました。研修報告書からは、国内外から多くの来館者が訪れ、さまざまな展示に関心をもたれている様子を実感したことがうかがえました。



展示室入り口で案内する初任職員

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

ミュージアムマイスター認定式

●2019年10月18日、2020年1月24日

総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。2018年度後期に理学院修士課程1年 遠藤優さん、文学研究科研究生 近藤喜十郎さん、理学院修士課程2年 山本茉奈さん、生命科学院修士課程2年 押野祐大さんの4名、また2019年度前期に薬学部6年 川名桃子さん、文学研究科修士課程2年 野瀬紹未さんが認定されました。6名の認定により、これまでにミュージアムマイスターに認定された学生は39名となりました。

10月18日と1月24日にそれぞれマイスター認定式が行われ、小澤丈夫館長から認定証が授与されました。認定式ではそれぞれマイスター認定までの道のりで学んだことや楽しかったこと、また苦労した点、これからの抱負などを語っていただき、小澤館長からもコメントをいただきました。マイスター認定までの道のりは簡単なものではなかったが、授業だけでは得られない体験をすることができたと語る学生の姿が印象的で、これからも博物館と社会を繋ぐ存在になれるよう活動していきたいと決意を新たにしていました。みなさんがマイスターコースでの経験を生かし、活躍されることを期待いたします。

マイスターコースについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/



左から山本さん、押野さん、小澤館長、近藤さん、遠藤さん



左から野瀬さん、小澤館長、川名さん

澤出有里
（研究支援推進員）

2019年度
第1回ボランティア講座＆交流会

●2019年7月16日

16グループで活動している250名の博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくため、博物館ではボランティア講座＆交流会を開催しています。

2019年度の第1回目は、江田真毅准教授に、夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」開幕直前に、展示室で特別解説していただきました。展示室手前ではK39遺跡・総合研究棟（機械工学系）地点の地層剥ぎ取り標本の説明を受け、展示への期待が高まりました。展示室では、7つのゾーンに展示された土器や石器、炉や住居の煙道の復元モデルについての説明を、当時の生活や遺跡発掘現場をイメージしながら伺いました。埋蔵文化財調査センターでの展示、現在のキャンパスの遺跡へと興味が広がりました。講座終了後は、江田先生を囲んでお茶をいただきながら質疑応答が続きました。

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）



江田准教授から地層剥ぎ取り標本の説明を受ける

「エルムの杜の宝もの」 ―道新ぶんぶんクラブとの 共催講座を開催

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、北海道大学の研究を知っていただく機会になっています。2019年度は5月に、世界で初めて人工雪を作ることに成功した中谷宇吉郎博士の研究について解説し、中谷研究室の復元展示室を案内する講座を開講しました。6月には札幌農学校第2農場見学会を開催し、少人数に分かれて講師と第2農場ボランティアによる解説ツアーを実施しました。7月には夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」と館内全体の解説ツアーを行いました。毎回、多くの方が熱心に参加され、展示解説ボランティアの協力により運営されました。

5月22日　中谷宇吉郎と雪の研究
杉山滋郎（科学技術史）

6月29日　札幌農学校第2農場見学ツアー
近藤誠司（家畜生産学）

7月27日　夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」・常設展示の見学
江田真毅（動物考古学）・湯浅万紀子（博物館教育学）



第1回の講座（写真提供：道新ぶんぶんクラブ）

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

北大生による展示解説 in 北大祭、オープンキャンパス、ホームカミングデー


参加者と対話しながら解説する

北大ミュージアムクラブMouseionは北大生が博物館を中心に活動するサークルです。主に北大のイベントの時期に展示解説をしています。本記事では、北大祭、オープンキャンパス、ホームカミングデーに行った展示解説について報告します。

北大祭では1年生メンバーを中心に来館者に展示解説を行い、上級生がそのサポートを行いました。1年生は公的な場での初めての解説であるため、ドキドキしている様子で初々しく、私たちも懐かしい気持ちになりました。

オープンキャンパスでは北海道大学入学を夢見る中高生が多く参加され、キラキラした眼差しで展示解説を聞いてくれたのが印象的です。また、その姿を見る親御さんたちの様子を見ているのも感慨深いものがありました。オープンキャンパスならではの北大生への質問も多くあり、メンバー全員で一生懸命に答えました。

ホームカミングデーでは卒業生を含めた人生経験も知識も豊富な方々が参加され、逆に教えていただくことも多く、大変有意義な時間になりました。また、昔の北大についてお話を聞く機会もあり、とても楽しく解説を行えました。

このように、ただ展示解説を一方的に行うのではなく、博物館という1つの話題を通して市民の方々と交流ができるということもこのサークルの楽しみであります。Mouseionと北大総合博物館を多くの方に知っていただき、より知的で興味深い活動を展開していきたいと思います。

［解説担当学生(学年は解説当時)とテーマ］

◉6月8日～9日　北大祭

岡田真歩（理学部3年）
「〇〇逆転昆虫『トリカヘ チャタテ』」

志田樹（法学部2年）
「ムラージュ展示の意義」

横内智丈（水産学部2年）
「北海道の地震とその対策」

米山彰香（農学部2年）
「オホーツク文化と擦文文化」

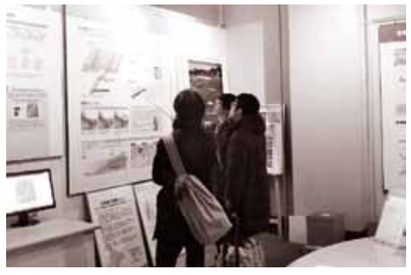
◉8月4日　オープンキャンパス

岡田真歩「同上」
志田樹「同上」
横内智丈「同上」

◉9月28日　ホームカミングデー

岡田真歩「同上」
米山彰香「同上」


解説「オホーツク文化と擦文文化」


解説「北海道の地震とその対策」

志田樹
（法学部3年）

ポプラチェンバロ・コンサート 古楽器でつづる バロックと映画音楽のマチネ

●2019年4月20日



当博物館には手で感じて、目で感じて、耳で感じて、じっくり味わう「感じる展示室」があります。この手法をコンサートにも生かしてみようと企画したのが今回のコンサートです。

コンサートでは、チェンバロの大きな模型を用意し、音が鳴る仕組みを解説しました。また、楽器内にカメラを設置してアクションをスクリーンに映し、音が鳴る瞬間を目と耳で体感していただきました。実際にお客様が楽器に触れる時間も多く設けました。たくさんの方の心と体にチェンバロのやさしい響きが深く染み渡ったことと思います。

古楽器で現代の音楽を演奏したのも新しい試みです。もちろんそのような楽譜は存在しないので、自分たちで編曲を行いました。長い歴史で考えれば、用意できる楽器にあわせて作曲し演奏してきたのが通例ですから、原点に立ち返った手法ともいえます。

当日は春の心地よい陽気のなか、博物館始まって以来の多くの来場者に、演奏を楽しんでいただきました。

野村さおり
（チェンバロボランティア）

金曜ナイトセミナー



8月23日の愛甲先生によるセミナー講演。

6月から10月の夏期間、金曜日はナイトミュージアムとして午後9時まで開館しています。夕刻に「金曜ナイトセミナー」として、一般市民、北大関係者を対象とした、平易な言葉で研究や大学の動向を伝える博物館セミナーを開催しています。

今年度は、「キャンパスマスタープラン（CMP）セミナー」、全4回を開催しました。北大キャンパスは、1世紀にわたる歴史と、国内でも有数の自然度を維持しています。キャンパスの理解と、よりよい活用法・ワイズユースを考えるよい機会となりました。講師の方々に厚く御礼申し上げます。

6月14日
稲荷 尚記（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
「ハナバチは日向に集う日陰者」

7月12日
熊谷 隼・千葉 利久・中村 晴歌
（北海道大学野鳥研究会）
「野鳥の目線から見る北海道大学」

7月26日
山田 浩之（北海道大学農学研究院）
「みんなでまもりつくるサクシュコトニ川」

8月23日
愛甲 哲也（北海道大学農学研究院）
「キャンパスの緑をどう守り?どう活かす?」

大原昌宏
（研究部教授／昆虫体系学）

カルチャーナイト2019

「星空とチェンバロの夕べ」

●2019年7月19日

カルチャーナイト2019では、今年も当館は展示室を21時まで延長公開、博物館ボランティアによるポプラチェンバロ・コンサート”、“宇宙の4Dシアター ”、そして札幌星仲間の方たちによる“夏の星座の観察会”を開催しました。

ポプラチェンバロ・コンサートでは、ソプラノ：岡元美和さん、チェンバロ：当館ボランティア 野村さおりさんによる『350年をかけて地球に届いている北極星の輝きと同時期に生まれた作曲家の4曲の演奏』で、心地よい優雅な空間をつくっていただきました。宇宙の4Dシアターでは博物館ボランティアと北大生による『天の川、めぐる ひととき』と題し、七夕の飾り付けをした会場で寸劇を交えた映像鑑賞会が開催され、多くの方に楽しんでいただきました。夏の星座の観察会は、小雨が降ったり止んだりと生憎の空模様で星の観察は出来ませんでしたが、メンバーの方たちが星を観ようと集まった人々に、普段あまり接する機会が少ない大きな天体望遠鏡を覗かせてくださったり、素朴な疑問に答えてくださったりと、特別な夜を盛り上げていただきました。ありがとうございました。来年は星空が観れますように……。

植松淳子
（研究支援推進員）


浴衣姿の親子連れ


星空が見えることを祈ってスタンバイ

宇宙の4Dシアター

「天の川、めぐる ひととき」

●2019年7月19日



七夕の飾り付けが施された「天の川、めぐる ひととき」公演会場

体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」を7月19日にカルチャーナイト公演として開催しました。「天の川、めぐる ひととき」と題した公演は、日が沈んだ頃から閉館時間まで合計3回実施し、ミュージアムマイスター学生参加プロジェクトの谷口加奈子さんがオリジナルシナリオ作成とナビゲーター（解説）を担当しました。パイロット（機器操作）はボランティアの平田栄夫さんが担当しました。3回の公演とも整理券がたちまちなくなるほどの人気ぶりでした。公演会場の講演室には、メンバー全員が天の川や笹、短冊などの七夕の飾りを施し、メンバーも浴衣や甚平を身に付けるなどの演出があり、公演内容の雰囲気と相まって来場者に大変好評でした。公演後の定例会では、公演を後方から記録した映像をメンバーで鑑賞しながら反省を行い、運営の改善点などを議事録にまとめて、次回の公演に向けた準備が行われました。

山下俊介
（資料部研究員）

第1回SPレコード鑑賞会

●2019年8月9日

1929年に竣工した総合博物館の建物（旧理学部本館）が90周年を迎えることを記念して、8月9日にSPレコード鑑賞会を開催しました。博物館ボランティアの石川惠子さん所蔵のSPレコードを提供いただき、石川さんとメディアボランティアのメンバーで企画を進めました。初回は、作曲者自身がオーケストラを指揮、又は楽器を演奏している曲を選びました。この中には博物館が竣工した年に録音されたSPレコードも含まれます。竣工当時の雰囲気を残している総合博物館2階の応接室（旧理学部長室）を会場とし、サウンドクリエイターの中坪淳彦さんに協力いただいて、鉄針と手回しの蓄音機でレコードが上演されました。電気的に増幅されてない音は新鮮で生々しく、90年前の時空間にタイムスリップするかのような感覚を憶える充実した鑑賞会となりました。参加者からは次回鑑賞会を期待する声も多く聞かれました。SPレコード鑑賞会は、連続企画として今後も開催します。次回鑑賞会もどうぞお楽しみに。



写真右）司会のメディアボランティアの武田満希さん、中）解説、SPレコード提供の石川さん、左）蓄音機を操作する中坪さん

山下俊介
（資料部研究員）

北海道大学 交響楽団有志による 室内楽の世界

●2019年9月13日



北海道大学交響楽団の有志が昨年9月に北海道大学総合博物館にて演奏をさせて頂きました。

当楽団では古典派やロマン派音楽の曲を演奏することが多く、バロック音楽の曲をチェンバロと一緒に演奏できることは博物館のみでできる貴重な機会です。そのため今回も楽しく演奏させていただきました。今回演奏させていただいたビバルディの曲ではチェンバロが合奏に加わることで色彩が豊かになり音楽の幅が広がることを実感しました。自分たちでは作り出せない音楽を共に作り、音楽の深さを大いに学ぶことができました。

僕たち演奏者がお越し頂いたたくさんの方々と音楽を共に楽しみ学ぶことができる博物館の演奏会はとても有意義なものであります。このような演奏会を今後も開催させていただきたくさんの方々に音楽をお届けすることで北海道大学総合博物館のさらなる発展に貢献できたら幸いです。ありがとうございました！

成田拓海
（北海道大学交響楽団）

邦楽の夕べ

●2019年9月27日



博物館の方からお誘いいただき、ミュージアムカフェの金曜ナイトコンサートの一環として、我々北大邦楽研究会で昨年9月に「邦楽の夕べ」を開催いたしました。このコンサートでは、主に箏・三絃・尺八の3種の和楽器を用いて、定期演奏会では演奏しないような2，3人の小編成の曲を8曲披露しました。現代曲を中心として演奏し、中にはピアノ（キーボード）と三絃の二重奏もあり、邦楽に対する世間一般の印象とは異なるような演奏会だったのではないかと思います。

コンサートには、年齢や国籍を問わず、立ち見が出るほど多くの方々が足を運んでくださりました。演奏中には、曲のリズムに合わせて身体を揺らして聴かれている方もいて、和楽器の音色を存分に楽しんでいただけたように思います。

和楽器は日常生活ではあまり馴染みのない楽器ですが、このような演奏会を通して、これからも皆さまに邦楽の魅力を伝えていけたらと思います。

酒井彩江
（北大邦楽研究会）

シンポジウム

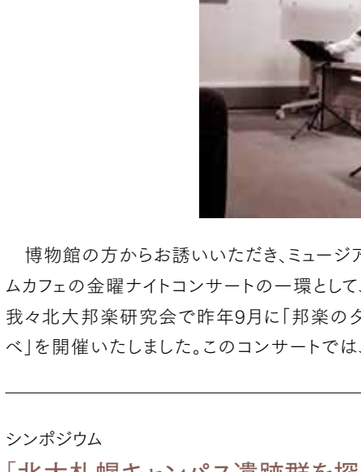
「北大札幌キャンパス遺跡群を探る」

●2019年9月28日

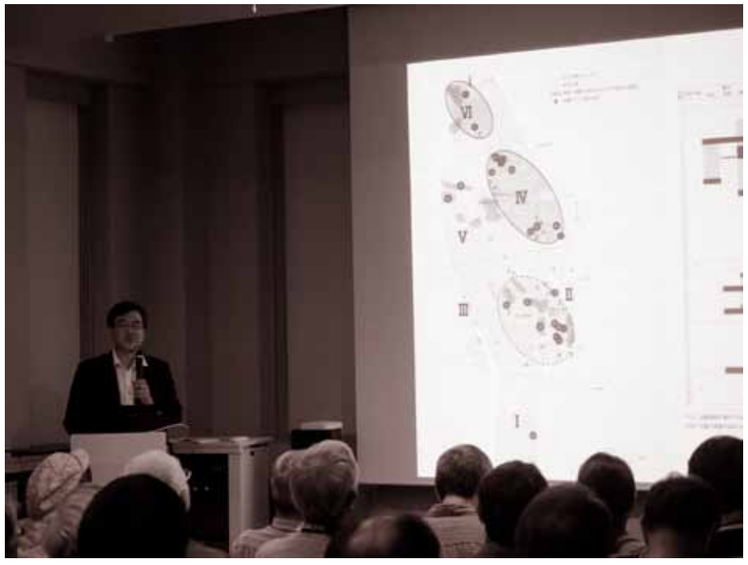
2019年9月28日（土）にシンポジウム「北大札幌キャンパス遺跡群を探る」を開催しました。夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」の制作にご協力いただいた先生方に、それぞれの専門分野から北大キャンパスで営まれた人々の生活の歴史について語っていただきました。

小杉康先生（文学研究院）の講演では、北大キャンパス内における縄文中期～アイヌ文化期までの遺跡の分布について語られました。続いて高倉純先生（埋蔵文化財調査センター）の講演では、利用された黒曜石の産地は続縄文前期には白滝産が比較的多く、より後の時代になると近傍の赤井川産が増えることが紹介されました。高瀬克範先生（文学研究院）からは、栽培植物の利用が擦文期以降に急速に発展し、ここに植物利用の画期が認められることが紹介されました。一方、私は動物利用の画期は擦文前期にあり、その前後で陸獣の出土量が減り、サケ科を中心とした魚類の出土量が増えることを紹介しました。また守屋豊人先生（埋蔵文化財調査センター）には企画展示の目玉の一つとして制作した地層剥ぎ取り標本を採取したK39遺跡総合研究棟（機械工学系）地点の調査についてご紹介いただき、山本正伸先生（地球環境科学研究院）には土壌中の黒色炭素を利用した人が火を用いた痕跡の最新の分析手法について語っていただきました。

専門を異にする研究者による最新の成果発表の数々に会場からも多数の質問が寄せられ、夏季企画展示のラストを飾るにふさわしいものとなりました。



シンポジウムポスター



講演中の小杉康先生

江田真毅
（研究部准教授／動物考古学）

2019年度 前期記録

2019年4月から2019年9月までに行われたセミナー・シンポジウム

バイオミメティクス市民セミナー
『持続可能な社会とバイオミメティクスを考える その1 今、海はどうなっているのだろう』
オラフ・カートハウス（千歳科学技術大学 教授）
梅澤 大樹（北海道大学地球環境科学研究院 准教授）
日時：4月6日（土）13：30〜15：30
参加者：60名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「水草を探して、集めて、調べて、守る。」
首藤 光太郎（北海道大学総合博物館 助教）
日時：4月13日（土）13：30〜15：00
参加者：110名

バイオミメティクス市民セミナー
『持続可能な社会とバイオミメティクスを考える その2 博物館の役割』
曽我 聡起（公立千歳科学技術大学 教授）
平坂 雅男（公益社団法人高分子学会 常務理事）
日時：5月4日（土）13：30〜15：30
参加者：64名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「『水の都』札幌 ーコトニ川を尋ねて」
宮坂 省吾（北海道総合地質学研究センター）
日時：5月11日（土）13：30〜15：00
参加者：160名

バイオミメティクス市民セミナー
『持続可能な社会とバイオミメティクスを考える その3 海の恵みを産業に 〜自然資本という考え方〜』
東 乙比古（北海道化学事業創造センター 代表理事）
山中 真也（室蘭工業大学 准教授）
日時：6月1日（土）13：30〜15：30
参加者：51名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「北海道の宝物 “コンブ”」
四ツ倉 典滋
（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 准教授）
日時：6月8日（土）13：30〜15：00
参加者：65名

地質の日記念展
「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」セミナー
「『水の都』その誕生と消滅 〜身近に残る水の痕跡〜」
古沢 仁（札幌市博物館活動センター）
日時：6月9日（日）13：30〜15：00
参加者：90名

第1回ミュージアム・カフェ金曜ナイトセミナー
「ハナバチは日向に集う日陰者」
稲荷 尚記（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：6月14日（金）18：30〜19：30
参加者：30名

バイオミメティクス市民セミナー
『持続可能な社会とバイオミメティクスを考える その4 安心・安全、健康、医療』
平川 聡史（浜松医科大学 准教授）
伊藤 健（関西大学 教授）
日時：7月6日（土）13：30〜15：30
参加者：68名

第2回ミュージアム・カフェ金曜ナイトセミナー
「野鳥の目線から見る北海道大学」
熊谷 隼、千葉 利久、中村 晴歌（北海道大学 野鳥研究会）
日時：7月12日（金）18：30〜19：30
参加者：60名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「見えてきた河原に広がる生物の世界」
根岸 淳二郎（北海道大学 地球環境科学研究院 准教授）
日時：7月13日（土）13：30〜15：00
参加者：70名

第10回博物館研究会講演会
ヌソ（犬ぞり）から考える アイヌ文化の復興
北原 モコットゥナシ
（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授）
近藤 祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 助教）
日時：7月14日（日）14：00〜16：00
参加者：40名

第3回ミュージアム・カフェ金曜ナイトセミナー
「みんなでまもりつくるサクシュコトニ川」
山田 浩之（北海道大学大学院 農学研究院 講師）
日時：7月26日（金）18：30〜19：30
参加者：15名

第11 回博物館研究会公開研究会
「地域における文化芸術活動の しまいかた／つづけかたをめぐって」
卓 彦伶（北海道大学大学院 文学院 博物学研究室）
「博物館の地域連携事業に対するロジック・モデルを用いた評価実践」
藤沢 レオ（彫刻家・NPO法人樽前arty+理事）
「祝祭性と日常性を歩く―定点観測からの視座」
山下 俊介（北海道大学総合博物館 助教）
日時： 7月30日（火）17：00〜19：00

バイオミメティクス市民セミナー
『持続可能な社会とバイオミメティクスを考える その5 環境、農業、経済』
仁連 孝昭（成安造形大学客員教授、滋賀県立大学名誉教授）
藤田 和徳（NPO法人アグリコミュニティ千歳 理事長）
日時：8月3日（土）13：30〜15：30
参加者：56名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「考古学からみた 北大キャンパス遺跡群における水圏利用」
江田 真毅（北海道大学 総合博物館 准教授）
日時：8月10日（土）13：30〜15：00
参加者：90名

第4回ミュージアム・カフェ金曜ナイトセミナー
「キャンパスの緑をどう守り?どう活かす?」
愛甲 哲也（北海道大学大学院 農学研究院 准教授）
日時：8月23日（金）18：30〜19：30
参加者：26名

バイオミメティクス市民セミナー
南方熊楠賞受賞記念講演会
「ヒトの目にとまらない生き物たち」
馬渡 駿介 先生（北海道大学名誉教授・
一般社団法人国立沖縄自然史博物館設立準備委員会理事）
日時：9月7日（土）13：30〜15：00
参加者：71名

北大総合博物館主催 土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「日本海の『カレイ』の種多様性を概観する」
田城 文人（北海道大学総合博物館 水産科学館 助教）
日時：9月14日（土）13：30〜15：00
参加者：80名

夏季企画展示シンポジウム
「北大札幌キャンパス遺跡群を探る」
小杉 康（北海道大学文学研究院）
高倉 純（北海道大学埋蔵文化財調査センター）
高瀬 克範（北海道大学文学研究院）
江田 真毅（北海道大学総合博物館）
守屋 豊人（北海道大学埋蔵文化財調査センター）
山本 正伸（北海道大学地球環境科学院）
日時：9月28日（土）13：00〜16：50
参加者：100名

2019年4月から2019年9月までに行われたパラタクソノミスト養成講座

きのこパラタクソノミスト養成講座（初級）
小林 孝人（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：9月7日（土） 定員：10名
対象：中学生以上（参加者10名）

2019年4月から2019年9月までの主な出来事

4月1日	小澤丈夫館長 着任
4月1日	首藤光太郎先生 着任
4月1日	技術補佐員 柴野伸幸さん 着任
4月1日	研究支援推進員 澤出有里さん 着任
4月6日	建築の学生展（〜 4/7）
4月20日	ポプラチェンバロ・コンサート 古楽器でつづるバロックと映画音楽のマチネ
4月27日	地質の日記念展示「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」（〜 6/16）
5月8日	文部科学省研究振興局競争的資金調整室長一行（2名）解説
5月9日	東京大学研究推進部長一行（7名）解説
5月29日	ミュージアムコンサート ポプラチェンバロとリコーダーの調べ
5月31日	東京工業大学財務部主計課長一行（4名）解説
6月9日	中国文化大学（台湾台北）一行（17名）解説
7月1日	博物館担当係長 井上猛さん 着任
7月8日	パヤオ大学（タイ）一行（6名）解説
7月19日	夏季企画展示「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」（〜 9/29）
7月19日	カルチャーナイト2019 星空とチェンバロの夕べ
7月19日	カルチャーナイト2019 宇宙の4Dシアター公演「天の川、めぐる ひととき」
8月9日	第1回SPレコード鑑賞会
8月28日	神奈川県議会議員一行（11名）解説
8月29日	衆議院調査局調査員一行（4名）解説
9月13日	ミュージアムコンサート 北海道大学交響楽団有志による室内楽の世界
9月21日	彬子女王殿下御視察
9月27日	金曜ナイトコンサート「邦楽の夕べ」
9月28日	校友会エルムホームカミングデーキャンパスツアー（33名）解説

入館者数（2019年4月〜2019年9月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
4月	16,761	5	0	写真パネル展「エゾリス〜冬を生きる〜」（〜4/14） 建築の学生展（4/6〜7） 「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」（4/27〜）
5月	21,163	28	8	「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」
6月	31,083	37	3	「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」（〜6/16）
7月	27,585	34	5	「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」（7/19〜）
8月	38,051	21	6	「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」
9月	22,685	21	2	「K39：考古学からみた北大キャンパスの5,000年」（〜9/29）

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。
（2019年4月1日～ 9月30日）

（敬称略）

◉植物標本
石田愛子, 蝦名順子, 大原和広, 加藤康子, 桂田泰惠, 金上由紀, 菊地敦司, 児玉 諭, 駒谷久子, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 須田節, 高岡さくら, 髙橋美智子, 田端邦子, 中川博之, 新田紀敏, 林 裕子, 藤田玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 松本珠季, 道川富美子, 見原悠美, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

◉菌類標本
石田多香子, 加藤和子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

◉昆虫標本
青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 柏崎 昭, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 志津木眞理子, 諏訪正明, 高橋誠一, 問田高宏, 永山 修, 古田未央, 細川真里栄, 松本侑三, 村上麻季, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希

◉考古学
安 翔宇, 荒谷 博, 池澤 泉, 今井彩乃, 内田耕平, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 木村則子, 木村映陽, 許開軒, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐々木勇人, 謝 倩氷, 末永義圓, 鈴木 花, ソンチャロエンチャイキットチョラウィット, 竹内 颯, 竹内美音, 田中公教, 田中望羽, 中田隆介, 二瓶寿信, 濱崎瑠菜, 林和花奈, 久井貴世, 堀 隼輔, 三嶋一輝, 三ツ橋薫, 森北那由多, 森本智郎, 守屋友一朗, 弓削龍之介, 廉暢, 渡辺双葉

◉メディア
伊藤優衣, 周 晨萱, 卓 彦伶, 武田満希, 藤井真知子, 山田大隆, 山本ひとみ

◉化石
朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 石崎幹男, 市橋晃弥, 糸井容子, 井上竜斗, 臼田みゆき, 太田 晶, 大宮 伶, 大村 颯, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 小田嶋一男, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 岸谷美恵, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井 実, 佐藤健一, 清水洲平, 高崎竜司, 武田満希, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 長瀬のぞみ, 本村美奈子, 前田大智, 三嶋一輝, 守屋友一朗, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子, 山田佐穂

◉北大の歴史展示
髙橋道子, 辻本丈登, 寺西辰郎

◉展示解説
在田一則, 石黒弘子, 太田 晶, 生越昭裕, 尾崎美雪, 河本恵子, 雲中 慧, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 谷口加奈子, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 永岡明美, 成田敦史, 西川笙子, 濱市宗一, 廣瀬由香里, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, ロバート・クルツ, 渡部典子

◉翻訳
ロバート・クルツ

◉平成遠友夜学校
大山圭也, 柿本恵美, 城下洽子, 須田 力, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 山岸博子

◉4Dシアター
安部布実子, 石神早希, 加地麻希子, 加藤啓子, 川名桃子, 佐薙伽奈, 田中裕子, 永井陸, 長谷川健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 増田文子, 渡辺真理子

◉ポプラチェンバロ
石川惠子, 小野敏史, 新林俊哉, 髙橋芙悠, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子

◉図書
岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 髙木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮒田久意, 星野フサ, 本名百合子, 村上龍子, 森秀代, 山田大隆

◉第2農場
石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 大山圭也, 木村幸司, 城下洽子, 高井宗宏, 辻孝太, 寺西辰郎, 橋爪俊明, 山田大隆, 渡部典子, 渡邊雄之介

◉ハンズオン
佐藤蓮花, 嶋野月江, 須藤和子, 種市晟子, 仲谷優輝, 花岡 瞳, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 山岸博子

◉展示改訂（地学）
在田一則, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 田中優雅, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 平井由実果, 松田義章, 山本真衣

◉きたみてガーデン
片岡奈々, 駄場優子, 玉田聖司, 豊田真慧, 星野愛花里

◉水産科学館
木村克也, 千田哲朗, 能登雄大, 古庄 誠, 横山敢紀, 馮婕, 小泉雄大, 三井洸太郎, 小幡光汰, 中條希美, 岡本大輝, 中山颯斗, 樋口淳也, 永井 陸, 酒井涼香

[表紙写真] 復元されたカムイサウルスの全身骨格

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第40号
編　集：山本順司・井上 猛
発行日：2020年（令和2年）6月12日
発行者：小澤丈夫

発行所：北海道大学総合博物館
所在地：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室